木の言い分 ⑭

〝シダレの撥〟

10月半ばと言うのに、まだ半袖で過ごせる。9月の一時的な冷え込みで、急ぎ始めた紅葉は遅々として進まない。
田刈りの稲株だけが秋を感じさせる。我が村では10月の第３週の土日が秋祭り、「だんじり」いわゆる「山車」を太鼓囃子と猥歌を歌いながら村中を曳きずり回す。そこには秋の収穫を神に感謝する風景は感じさせてくれない。いやいや、「木の言い分」で我が村の季節便りを書くわけではないが、まずはプロローグを・・・

さて、植栽樹木にも流行があり、最近の緑化には多種多様な樹種が採用されている。樹木医として首を捻りたくなる時もある。そんな中で、わが町で十数年前、街路樹に昔懐かしいシダレヤナギが植えられた。世はハナミズキが流行し、街路樹にシダレヤナギとは如何なものか、と言うもののシダレヤナギに罪はなく、数年後の素晴らしいヤナギ通りを期待して維持管理に勤しむ。

読者諸兄は既にご承知のように、シダレヤナギは成長の早さなどから街路樹として疎ましがられ、その姿を消し始めて久しい。繁茂、下垂する枝葉は透視を阻害し、落葉は油成分を含みスリップの原因ともなり、毎年の剪定を余儀なくされ管理費の浪費者として、「銀座のヤナギ…♪」もナツメロの中の樹種となって行った・・・

剪定枝を花材（切花）として花屋がわざわざ捜し求めに来たこともある。材は柔軟で加工しやすい特徴から柳行李、柳箸、楊枝や版板などに利用されたとの記述が多い。我が町のヤナギ並木も苦情や維持管理費の多さに疎ましがられ、その上、強剪定の繰り返しでみすぼらしい容姿に、それでも出来の悪い樹木ほど可愛いく、日々の成長を楽しみにしていた。

ところが、ある日突然、幹周80cmに成長した１本が地上60cmの高さから伐採されていた。あたりには枝一本、葉一枚すら落ちてなく忽然と姿を消しているではないか・・・。殺人いや殺木現場を捜索するにも証拠も目撃者もなく魔可不思議な事件が、誰が何の目的でと頭を捻っていると、秋祭りの練習の太鼓の音が聞こえ、「あっ！　ひょっとしたら?」と祭り好きの同僚から声、よくよく聞くと太鼓の「撥」には、しなやかで細工のしやすいシダレヤナギが最適とか。

「最近、ヤナギがなく撥の新調出来なくて・・・」と、どこの本を読んでもシダレヤナギが「太鼓の撥」に利用されるとは記されていない。意外な処で関わりがあることを知った。秋空の下、聞こえてくる太鼓囃子を追いかけて、「伐った奴はここにいるぞ」の怨み節を頼りに犯人捜しでも・・・。

「殺木者め！きっと祭神、
いやシダレヤナギのばち（罰）が当たるぞ！」

樹木医　浅川　充（富田林市）